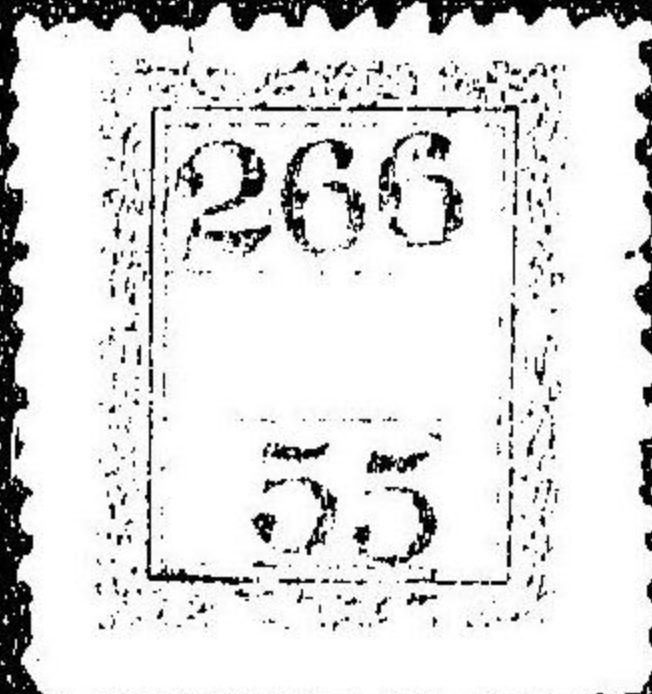




活きたる書翰文教範

北川博愛著



079854-000-1

特19-976

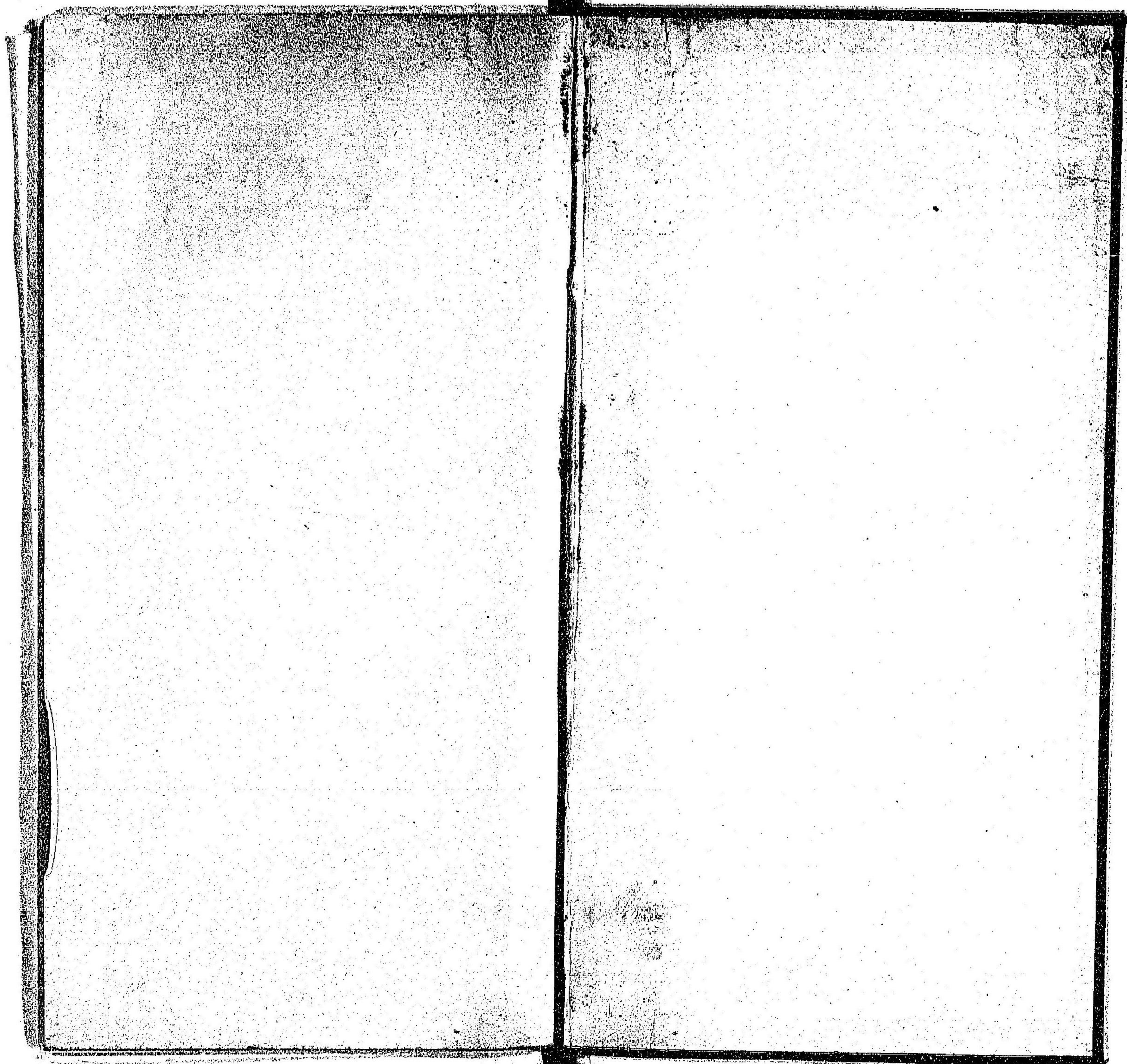
活きたる書翰文教範

北川 博愛 / 著

M44. 3

DAC-3954





特 19  
976

東京閣工  
中學校教諭  
北川博愛著

活字  
書翰文教範

全

東京  
求光閣發行

44.4.8

## 緒言

書翰文の書籍の多きことは、汗牛充棟も當ならざるに、何を苦みて、この書をものせしか。爾ふ暫時、余が説を聞かれんことを。

現今、ありふれたる書翰文に關する書籍は、その厚薄大小の差こそあれ。其の内容に至つては、殆ど同一轍に出で、新機軸なきのみならず、時代の變遷に氣づかず、徒らに、舊套を墨守し、無味乾燥なるもの多く、かつ、先方の地位身分を區別せず、敬語のみを用ゐれば、それにて、事、足れりと思ふが如き書きぶりなりき。是を以て、その書を模範として作

れるものは、たゞ敬語のみを多くして實意あること少なし。下婢に與ふる文と主人に奉る文との區別だになき或は朋友と師とに送るに同一の字句を用ゐるが如きは、有りがちなりき。本書は、特に、これ等のことに注意して作り、用字及び助動詞の活用等については、頗る、注意を加へたり。郵便にさし出す場合における心得も、初學者には利する點多かるべしと信じ、くどくしきをも厭はで、便宜記入したり。

明治四十四年一月三日

著者識す

活きたる書翰文教範

目次

●書翰文研究の必要……………一

●活きた手紙と死んだ手紙……………二

●文体について……………五

●手紙は月鏡の如し……………九

●手紙は流水の如し……………一一

- 手紙を上手に書くのは一生の徳…………… 一一
- 急ぎの文は練つてかけ…………… 一三
- 簡單明瞭…………… 一五
- 先方の地位身分…………… 一六
- 龍頭蛇尾…………… 一七
- 鵝的文…………… 一八
- 手紙をうまく書く法…………… 二〇
- 文の組立…………… 二一

- 誤り易い語句…………… 二三
- 誤り易い動詞…………… 二六
- 音便の誤り…………… 二九
- 顛倒句の誤り…………… 三三
- 封筒と巻紙…………… 三四
- 表書の認め方…………… 三五
- 書翰文の用語例…………… 三九
- 一、往信起筆用語…………… 三九

- 二、返信起筆用語……………四〇
- 三、時候用語……………四二
- 四、先方の起居伺候用語……………五六
- 五、自己の安否……………五八
- 六、末尾語……………五九
- 自他の稱呼(表)……………六一
- 脇付……………七三
- 墨つき……………七六

- 年月日……………七六
- 返信を認めるについての心得……………七七
- 手紙の用紙……………七八
- 〔作 例〕**……………八〇
- 〔祝賀門〕**……………八〇
- 新年を賀す(二)……………八〇
- 右返書(二)……………八一
- 婚姻を祝す……………八四

- 右返詞 ..... 八五
- 試験及第を祝す ..... 八六
- 右返事 ..... 八七
- 中學校卒業を祝す ..... 八八
- 右返事 ..... 八九
- 病氣全快を祝す ..... 九〇
- 右返事 ..... 九一
- 入學を賀す ..... 九二

- 右返辭 ..... 九三
- 友人の高等商業學校に入學せしを祝す ..... 九四
- 右返事 ..... 九七
- 〔見舞門〕 ..... 九八
- 留守見舞 ..... 九八
- 右返事 ..... 九九
- 寒中見舞 ..... 一〇〇



●右返事

..... 一〇二

●洪水見舞

..... 一〇四

●右返事

..... 一〇五

●暑中見舞

..... 一〇七

●右返事

..... 一〇八

●残暑見舞

..... 一〇九

●右返事

..... 一一〇

●寒中見舞

..... 一一一

●右返事

..... 一一四

●火事見舞

..... 一一七

●右返事

..... 一一八

〔誘引門〕

..... 一一九

●梅見に誘ふ

..... 一二〇

●右返事

..... 一二一

●花見に誘ふ

..... 一二三

- 右返事 ..... 一三三
- 郊外散歩に誘ふ ..... 一二四
- 右返事 ..... 一二五
- 菖蒲見に誘ふ ..... 一二七
- 右返事 ..... 一二八
- 菊見に誘ふ ..... 一二九
- 右返事 ..... 一三〇
- 紅葉見に誘ふ ..... 一三一

- 右返事 ..... 一三二
- 〔贈呈門〕 ..... 一三三
- 餞別品をおくるに添へて遣す ..... 一三四
- 右返事 ..... 一三五
- 雑誌をおくる ..... 一三六
- 右返事 ..... 一三八
- 注文品をおくる ..... 一三九

- 右返事 ..... 一四一
- 梅花をおくる ..... 一四一
- 右返事 ..... 一四二
- 桃花をおくる ..... 一四三
- 右返事 ..... 一四四
- 朝顔の種子をおくる ..... 一四五
- 右返事 ..... 一四六

- 病氣を報知す ..... 一四七
- 右返事 ..... 一四八
- 死去を知らず ..... 一四九
- 死去報知のはがき文 ..... 一五〇
- 起居報知 ..... 一五〇
- 右返事 ..... 一五二
- 病状報知 ..... 一五三

- 右返事……………一五四
- 商況をしらす……………一五五
- 右返事……………一五六

〔招待門〕

- 花見の宴に招待す……………一五七
- 右返事……………一五九
- 病氣全快祝ひに招く……………一六〇

- 右返事……………一六一
- 婚禮の宴に招く……………一六二
- 右返事……………一六三
- 卒業せし祝宴に招く……………一六四
- 右返事……………一六五
- 除隊祝ひに招く……………一六七
- 右返事……………一六八

〔照會門〕

- 轉校につき在京の友人に照會す ..... 一六九
- 右返事 ..... 一七一
- 在京苦學生の状況を照會す ..... 一七三
- 右返事 ..... 一七五
- 米相場を問合す ..... 一七九
- 右返事 ..... 一八〇
- 注文品について照會す ..... 一八一

〔依頼門〕

- 右返事 ..... 一八一
- 店員雇入について照會す ..... 一八二
- 右返事 ..... 一八四
- 品物買入をたのむ ..... 一八五
- 右返事 ..... 一八六
- 作文の添削を乞ふ ..... 一八七

- 傭人の周旋を依頼す ..... 一八八
- 右返事 ..... 一八九
- 入學につき保證人をたのむ ..... 一九〇
- 右返事 ..... 一九二
- 借屋の周旋をたのむ ..... 一九三
- 右返事 ..... 一九三
- 稻刈に手傳をたのむ ..... 一九五
- 右返事 ..... 一九六

- 提灯を返却す ..... 一九六
- 右返事 ..... 一九七
- 借入金返納 ..... 一九八
- 右返事 ..... 一九九
- 書籍返却 ..... 二〇〇
- 右返事 ..... 二〇一
- 雨具に添へて ..... 二〇二
- 右返事 ..... 二〇三

●借用品返却 ..... 二〇四  
●右返事 ..... 二〇五

〔督促門〕

●貸金の催促 ..... 二〇五  
●右返事 ..... 二〇六  
●貸本の催促 ..... 二〇七  
●右返事 ..... 二〇八

〔雜門〕

●轉地先より親友の許に ..... 二〇九  
●右返事 ..... 二一〇  
●梅枝に添へて ..... 二一一  
●右返事 ..... 二一二  
●雪見を催す ..... 二一二  
●右返事 ..... 二一四  
●久しく逢はざりし友に ..... 二一五

- ◎習字のことについて友の許に……………二二六
- ◎右返事……………二二七
- ◎父の許におくる……………二一九
- ◎缺席多き友に……………二二〇
- ◎右返事……………二二二
- ◎夏蜜柑を贈られしを謝す……………二二五
- ◎右返事……………二二六
- ◎轉居を報ず……………二二八

- ◎右返事……………二二八
- ◎缺席届……………二二九
- ◎遅刻届……………二三〇
- 〔範 文〕……………二三三
- ◎某に贈る文……………二三三
- ◎勝安房に贈る文……………二四〇
- ◎大久保一藏に贈る……………二四五



- 宥應上人に贈る文……………二四七
- 岡田鴨里に贈る文……………二四八
- 三久に贈る文……………二四九
- 鈴木梅仙氏に贈る……………二五〇
- 徳富蘇峰氏に贈る文……………二五一
- 改新黨の三掌事に贈る文……………二五二
- 石水春月二子に贈る文……………二五三
- 角田竹冷氏に贈る文……………二五五

- 篠崎夫人に贈る文……………二五八
- 家郷に贈る文……………二六一
- 年の始人のもとに……………二六五
- 福羽美静に與ふ……………二六六
- 野遊に誘ふ文……………二六七
- 月あかさ夜友のもとに……………二六九

活きたる  
書翰文教範目録終

活きたる書翰文教範

書翰文研究の必要

遠方にとる人に、自分の思想を傳へやうとするには、手紙の力を借るより外はありませぬ。電話もあり、電信もある世の中で、手紙などの稽古は必要でないといふ人も、たまには有りますが、電話の如きは、架設し

北川博愛著

てある所でこそ便利であれ、現今では無いところの方が多い。よし電話があるところにして、遠方の人と話しするとせば、その料金は莫大であつて「到底、言ふべくして行はれない話であります。電報も亦その通りで中々安くはまゐりませぬ。三錢で日本全國はあろか、支那までも用事を辨ずることが出来ます。簡単な用事の場合には僅かに一錢五厘で間にあふのであります。實に有りがたい事ではありませんか。

### 活きた手紙と死んだ手紙

如何なる手紙が生きてをるので、いかなる手紙が死んでをるのであるか、と言ひますれば、讀んでゆく間に、何となう愉快な情が起つて、その人に丁度あふやうな心地もし、その手がみに接したのは、直接に、その人の聲を聞くやうな心地のするやうに書いてあるのを、私は活きた手紙といひたいのです。

むつかしい字句を澤山ならべて、高尚なことを書き立てても、情の籠つて居ない、味のないことは、まるで蠟を嚼むやうな心地のする手紙は、死んだ手紙といひます。

書札の文字にも死活あり。たとへば「一筆啓上仕り候ふ」より「御無事、御堅固云々」「私宅、恙なく、時候御自愛、猶後音を期す云々」は書くも書かざるもなに程の事もなさなり。さるを「この間の寒氣は我が郷は海濱に氷を見」或は「半月一月の早なるに、餘所には夕立すれども、こゝには降らず」などいへば、同じ寒暖を叙ぶるにも、その氣色のあらはれて、書狀の文字おのづから活くるなり。月日の末に「この書、認めたる時は雨しきりに降り、杜鵑、二聲、三聲、音づれぬ」など書きたるは、いよく、その時、その人の姿も思はるゝやうにて、おもしろし。長さ三

尋あまりある書札にても、死にたるあり。三行四行の書にても、活きたるあり。注意すべきことにや。

と菅茶山著「筆のすさび」に見えてをる。十分に玩味すべきこととてあります。

### 文體について

書簡に用ゐる文體は如何なる體が最も現今時世に適して居りますか、といふことについては大分に議論があります。

## 談話體に書く

のが、一番に宜しいといふ人もあり、又

## 候文體に書く

のが、一番に宜しいといふ人もあり、

## 候文や談話體を混合して少しも斟酌せずに書く

のが、よいといふ人もありますが、談話體に書くときは、長くなり易く、候文にすれば、千篇一律となり易く、風味がない文に陥り易い。是に於て

第三の混合文體が何れの方にも偏しないから反つてよいといふこととなりませんが、私の考へては、稽古するに當つては、談話體も候體もやつてゆくのが今の時世に應じた勉強の仕方だらうと思ひます。現今では何れの體を社會で一番最も多く使用してをるかといひますれば、候體です。これは昔から今日まで貴賤尊卑の別なく都會と僻陬との區別なく襲用してをるのでありますから、その勢力は最大であります。今、兩者を比較しますのに、簡單を欲せば候文を第一とすべく、意味の疏通を言はゞ談話體を第一とすべきでせう。候文は時を表はす點において往々誤り易いやうです。例へ

ば「あした御伺ひいたします」といふ場合に

### 明日御伺ひ致し候

と誤つてかくやうなことが度々あります。

### 忙しい世の中

では、長つたらしい談話體などは、迎も書いてをれませぬ。勢、どうしても簡単な書きぶりを貴ぶやうになるのは、止むを得ぬことであります。簡単な事項を書く場合には、兩者にちける差といふものは、別ちかねますが、

少し長いものを書くとなりますと、候文のが、早く埒がなさまして、實業界などでは重寶がられます。ですから、私は先方を區別して、この兩體の何れかを用ゐるのが得策だと信じてをります。即ち先方が忙しい商業家であつたらば候文を用ゐ、もし友人であるとか、閑暇で仕方がないといふやうな人ならば、談話體を用ゐて、ながくしう書くがよからうと思ひます。

### 手紙は明鏡の如し

喜んでゐる時に、鏡に對へば其の影も、嫣然として映り、怒つてゐる時には、いやらしい姿が映る。これは、止むを得ないこととて、怒つて居て、にこくした顔を映さうといふことは、とても、できない話であります。

手紙も、その通りで、立腹して居る時に書いた手紙は、文字といひ、句といひすべてが、穩當でありませぬ。このやうな不穩當な手紙を、人にさし上げた時には、甚だよくない結果を招き、甚しきに至つては、とりかへしのつかぬことゝなります。だから、心の穩かでない時は、手紙を認めないやうにするのも社交上の一大心得であります。もし、止むを得ない事情

で、立腹の場合に書簡を認めなければならぬことの、あつたときは、たとひ、少しぐらゐ遅れても、精神のちぢつくまで筆を採らないやうに修養すべきであります。

### 手がみは流水のごとし

一度、わが手から離れて、先方へいつてしまへば、その手紙は、もとの儘では、我手には入りませぬ。丁度、流れてゆく水のやうであります。一旦、出してしまつてから、戻しまつた、あのやうなことは、書かなければ、

よかつたものを、徒らに腹を立てさせるやうなものだ、惜しいことをした、  
あゝ、残念だ」と後悔しても取りかへしは、つまませぬ。故に、投函する  
までに、精讀すべき價值は十分あります。

### 手紙を上手に書くのは一生の徳

ここに上手といふ語を用ゐましたのは、その文章、その文字、共に巧みな  
のをいふのであります。うまく文字が書いてありましても、文章が拙くて  
は、その人がつまらないやうにみえます。出来ることならば、文章も文字

も共に上手にあつてほしいものです。これは、中々、容易じゃありません。  
餘程、勉強せねば、むづかしいことです。手紙のうまい人は、一生涯の徳  
といふばかりでなく、末の世までも名譽となります。

### 急ぎの文は、練つて書け

慌てゝは事を仕損ずるといふことは、昔から言ひ傳へて誰も耳にしてゐる  
ことではあります。これを實際に行ふ人は少いやうであります。使者が、  
「お返事を頂きたうございます」といつて玄關に待つてゐる時は、誰でも心



の、せかれるものです。誤りは斯様な際に湧き易いものですから、注意せねばなりません。所謂、急ぎの文は、ねつて書くべきであります。

### 三度読み返す

頼山陽先生はいかなる急用の手紙といへども、三度はよみかへして、出されたといふことです。このやうな學者でも、なほ、過失はありはすまいかと念に入れられたのです。況んや、凡人に於てをやであります。

### 簡單明瞭

書簡文の要點は、簡單明瞭を第一とします。世の中の忙しうなるにつれて、書簡文の如きも、可成だけ、簡單にして明瞭なることを貴ぶやうになりました。これは、時勢の然らしめる處で、人力の如何とも致し方がないことてあります。だから、出來得る限り、簡單にして明瞭といふ書振にしたいものであります。處が、あまり簡單に過ぎて、要點のわからないやうなところとなつては、手紙の効力を失ふわけです。これは、たと一口には言ひつ

くせませぬ、熟練と勉強とを俟つて、初めて効を奏するのであります。

### 先方の地位身分

貴い身分の人に送る手がみと、身分の下な人におくる手紙とは、言葉づかひ、字の書きぶり等に輕重の差を立てねばならぬことは、申す迄もないことで、面と面と、直接あはした時などは、自ら言葉づかひなどは違ふのであります。それを手紙の上には表はす時には、あまり輕重をつけないのは、從來の書き振りであります。これは、宜しく改良すべきことであります。

うと私はおもひます。試みに、主人に奉る手紙と朋輩に送る手紙と同一の語を用ゐて認めたらば、如何でありますや、随分、滑稽だらうと思ひます。

### 龍頭蛇尾

前文ばかり長うて、本文の極めて短い文は、丁度、龍の頭で蛇の尾のやうですから、これを名づけて龍頭蛇尾の文と申します。これは初學の人に多いですから、注意を拂はなくては、この弊に陥り易いものです。たとへば一書拜呈仕候日増しに寒冷に向ひ候處御一同様御變りもなく御暮しなさ

れ候や伺上候次に私方一同無事に消光罷在候間乍憚御安心下された候  
 儲この鮭北海道の親戚より到來仕候間進上仕候早々以上  
 といふが如く、冒頭が九十字以上もあつて本文は二十字足らずである。こ  
 のやうな文は、實際に受取つた場合にもしろくないものであります。

### 鷓 的 文

怪鳥として世に傳へられてをる鷓クエといふ鳥があります。その名の起因は、  
 近衛帝の時に、源頼政が射て獲たといふ想像の獸で、猴首、虎身、蛇尾で聲

は、鷓のごとしといふことから、移つて怪鳥としたが、その實は、ヌエド  
 リ、ヌエドドリといひまして、梟フクロノの類だといひますが、今、暫く傳説の怪  
 鳥として、ここに引用したのですが、いかなる文を鷓的クエ文かといひますと、  
 頭は漢文、胴は和文、或は直譯文體、結尾は談話體といふやうに種々の文  
 體を用ゐて綴つたのをいひます。この種の文は讀みにくく、又書いてある  
 のをみましても、不快の感を起すものでありますから、一切、書かないが  
 よろしう。

### 手紙をいかに書く法

手紙の文字のすら／＼と書いてあるのは、讀者をして何となく快感を催さしめるもので、誰も上手に書きたくないと思はないものはありませぬが、一旦夕になれるものではありませぬから、誰でも苦心してをるのでありますが、今、その上手になれる方法として是認せられてをる事項を左に記してみます。

一、名文といひ傳へられてあるものは、古今の別なく熟讀すべきこと。

- 一、出来るだけは、名文を筆記し、日夜熟讀して暗誦すること。
- 一、折に觸れて試作すべきこと。
- 一、手習すること。(文が、うまくても、手の拙いのは、二三割も損になる)。

### 文の組立

いかに、澤山な石や材木がありましても、徒に積んだだけでは家屋と名づけることが出来ませぬ。製圖にもとづき、それぞれ排置をよくし大工なり石工なりの手を藉りて組み立てゆかねば家とはなりませぬ。これと同じ

て、文章の語句を徒らに陳列したばかりでは、文といふことは、迎も出来ませぬ。それ／＼、その用所用所に適當な語なり、句なりを入れはめてゆくやうにしなければなりません。近頃は辭書の書籍が澤山出まして、いろ／＼よい語や句がならべてありますから、それをうまく排列して意味の貫通するやうに力めたらばわけもなく一文章は綴れます。しかし、私の經驗に據りますと、彼此字書から引張りまはして作つた文は、錦のきれぎれを綴り合せて一枚の着物に仕立てたやうな風にみえてよろしくありません。それよりは、木綿でもよろしいから、一反のもので仕立てた着物がみやす

うありますとおもひます。

### 誤り易い語句

手紙の文で一般に誤りやすいものの内で、重なるものを、すこしばかり記しておきたいと思ひます。

#### 申上候と申上どへ候

現在のときは申上候で、未來のことをいふ場合には可<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候と心得ておけば大したまちがひはありません。例へば

手紙を以て申上候 (現在)

以手紙可申上候 (未來)

進達仕候 (現在)

進達可仕候 (未來)

「候へば」と「候はば」

已に定まつてをることといふ場合には「候へば」を用ゐ、未だ定まつてゐない場合には「候はば」を用ゐるのであります。たとへば、

用事有之候へばまゐりかね候

は用事のあるといふことが定まつてをるのである。

明日天氣よろしく候はゞ御同伴仕たく候

の天氣は、よいか、わるいか定まらないのであります。又、殊に多いのは、

「候へ」を「候得」

と誤る類であります。候は、ハ行に活用する動詞ですから候得とかくのは誤りてあります。

下さるまじく候

と書くのを「下さるまじく候」と誤るのもある。「まじく」は動詞助動詞の

第三轉（終止法）につく助動詞ですから下なる字じへ、成なる字じへ、な  
どしかくのが正しうのです。

誤り易い動詞

報い、老い、悔い、用ゐ、教へ、榮え、植ゑ、強ひ、越え、飢ゑ、  
据ゑ等てイエなどと發音する動詞に多いやうです。今左にこれを列べ  
てみます。委しうことは文法書に譲ります。

報い らい 報ゆる らゆる 報れ られ

植ゑ	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
榮え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
教へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
用ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
用ゐ	ゐ	ゐ	ゐる	ゐれ	ゐよ
悔い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
老い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ

飢ゑゑううるうれゑよ  
 据ゑゑううるうれゑよ  
 強ひひふるふれひよ  
 越ええゆるゆれえよ

(注意) 右の内用ゑはワ行とハ行との二種に活用するから、その一つを用ゐたらばよろしい。それを一文中に或は用ゐるとかき、或は用ひ、用いなどと混用することは見苦しいものです。英語の譯し

たものなどに往々見ることですが注意すべきことです。(越えはサ行にも活用することは言ふまでもありませんが、今は誤りやすいと思つた部分をあげたのであります。)

### 音便の誤り

音便とは、言葉の調子を和げんためか、強めんために其の音を變ずるのをいひます。たとへば

朔日つひを ついたち



松明たきまつを たいまつ

就きてを つらて

惜しきことと 惜しうこと

といふやうなのを申します。

最も多く誤りますのは、沿まひてを音便では沿まうてとかきます場合に沿まいてと誤るか、沿まふてと誤るかであります。襲まひては襲まうてとかくべく、従まひては従まうてとかくか従まつてと書くのが至當であります。かやうな誤りは就

中ハ行四段の動詞に多いのです。

候まひて 候まうて

願まひて 願まうて

添まひて 添まうて

伺まひて 伺まうて

次は、形容詞の美ましうといふのを音便で美ましうと書くべき場合に美ましふとかいたりする誤りが、多いやうです。

美しくは美しう

辱くは辱う

早くは早う

嬉しくは嬉しう

と書けばよろしい。他は之に準じて知つて頂きたいと思ひます。尙、文法の御話を申す折に申します。

### 顛倒句の誤り

不取敢と書くべきを取不敢と誤り、被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>を成被下と誤り、或は可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>一</sub>とかくべきを被下可<sub>レ</sub>と誤るなどは、初學の人に多く、かつ、生ものじりの人が誤用するやうです。僅かに一二句のことて人に、彼此、評せられるのは惜しいことだと思ひます。

この顛倒語は用ゐない方がよいといふ人もありますが、古へから慣用してをるものだけは、敢へて差支へはないのみならず、書き下しにするよりは

軽便でありますから、私は使ふ方に賛成する方であります。但し、誤用しては頗る迷惑に感じます。

### 封筒と巻紙

封筒及び巻紙は、宛名の位置身分により、品質の如何を吟味すべきことは、申すまでもなく、吉凶の場合を考へて用ゐることも心得ておかずば、先方の感情を害ねることもあります。

経済上のことばかりを考へて、品質の粗悪な事に氣づかず、ひやみに認め

るなどは、反つて、自己の損を招くこととなりませう。注意すべき事でありませう。

### 表書の認め方

従来は、住所よりも宛名を大きく書きましたが、現今では、之に反し宛名を小さく住所を大きく書く方取扱上便利であるといふことです。これは、實際にその職に當つてゐる人の御話であります。何府(縣)何郡何町(村)何番地といふことは十分わかり易く、同居人ならば、「誰方にて」

といふ肩書をわすれては、配達上非常の手数を要し、遅れることは言ふ迄もなく、或は不着となることもありませう。

三重縣鈴鹿郡

牧田村大字甲斐三十三番屋敷

北川 双山様

切手

親展

裏  
切手は左方上部に正しく貼るべし。

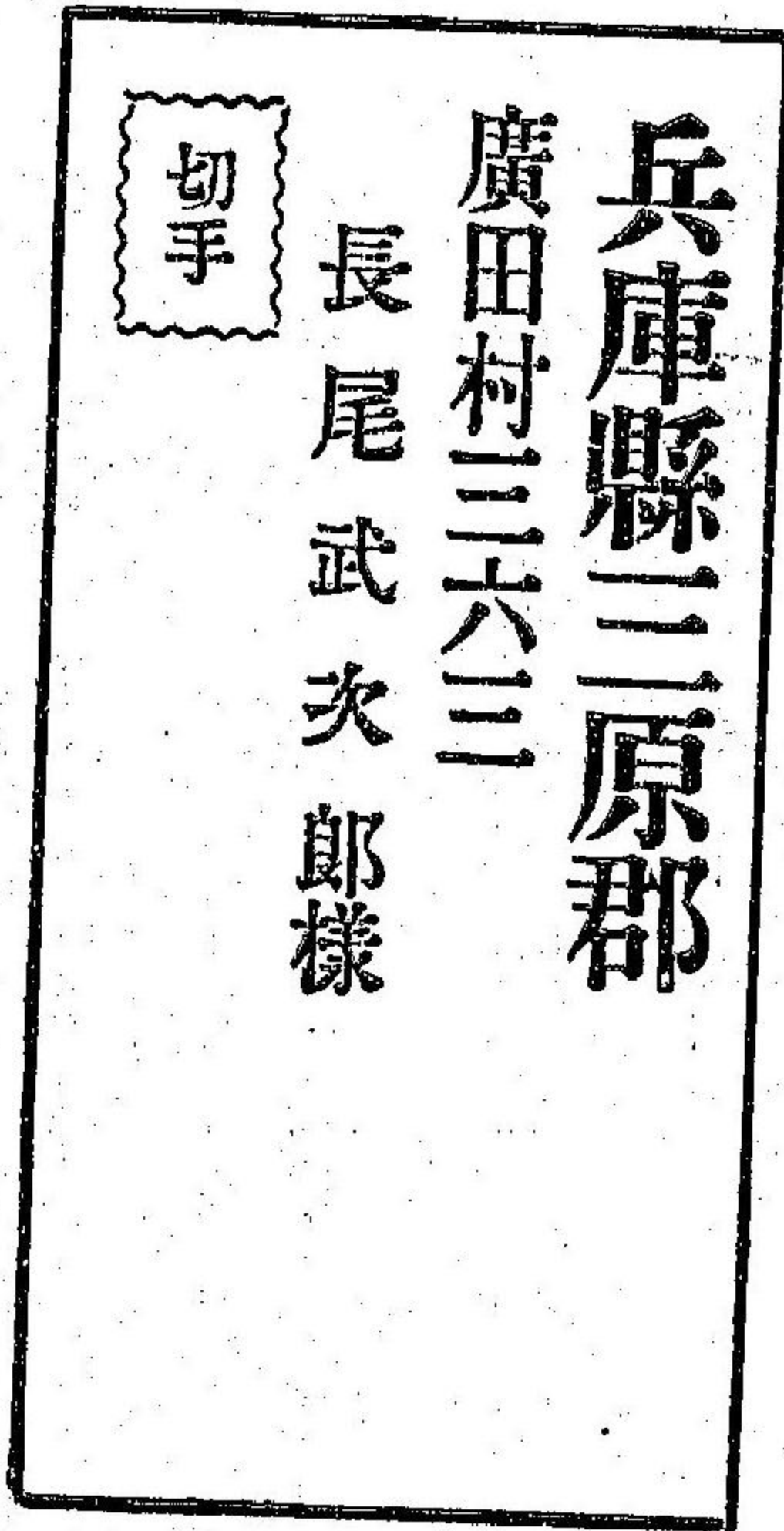
明治四十三年十二月三十一日

東京市神田區五軒町十四番地

北川博愛

(注意) 裏面の合せめには、字を書かぬこと。合せめの左方へ住所氏名、その右方へ年號月日記入のこと。

はがきの表面の認め方



(注意) 差出人の姓名は裏面なる文句の終りに書くこととし、表面には書かないがよい。これは、郵便局の消印を捺すだけの餘白を存しておくためです。姓名を裏へ書くことを忘れたならば、それこそ差出人もわからず、受信者においては返事の出し方に困りますのみならず、自分も不利益となることは、言ふまでもありません。

### 書翰文の用語例

#### 一、往信起筆用語

- 一書拜啓仕り候。
- 寸楮謹呈仕り候。

愚札を以て申上候。

短簡拜呈仕り候。

謹啓仕り候。

謹啓。

前略御免下されたく候。

二、返信起筆用語

御書面拜見仕り候。

御紙面拜讀仕り候。

御懇書忝く拜讀仕り候。

芳墨拜見仕り候。

華簡拜誦仕り候。

某月某日附の御狀本日正に拜受仕候。

尊書捧讀仕候。

貴翰披見仕り候。

玉章拜誦御申越の趣承知仕り候。

## 三、時候用語

一月

甚寒の候に御座候處。

寒威凜冽の候と相成り候處。

嚴寒の節に御座候へども御變りもなく被爲入候や。

朔風凜々として肌に沁み申候。

朔風鵝毛を飛ばし枯木花咲き候。

日夕爐邊にのみ親しみをり候。

降り積れる雪のみを友に、寂しく暮しをり候。

堅氷池塘を封じ候。

二月

春寒料峭の候。

餘寒實に凌ぎがたく候。

殘寒なほ去りかね候。

寒氣稍弛み候。

日増しに凌ぎやすう相成候。

黄鳥春信を齎し候。

残雪未だ消え不申候。

紅梅二三枝笑を含み申候。

三月

漸く春めき申候。

春暖の候に相向ひ候處

春色相催し候。

暖氣日に相増し候。

四方の草木の芽も春めき申候。

柳の糸も淺緑に染めはじめ申候。

四月

春暖の候。



百花爛漫の候。

春色駘蕩の候。

春風肌に適し逍遙せんはこの上なき候と相成申候。

踏青の候。

葉櫻の蔭芳草を履みつゝ散歩せばいかばかり心地ゆかんと存候。  
柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦おりなす候と相成候。

五月

薄暑の候。

聊か暑氣を覺え候。

新緑鮮かなる頃と相成候。

麥葉の緑と菜花の黄とは宛然活きたる錦に候。

一雨ごとに早苗の暢びゆくやうにみえ候。

農家多忙の頃

養蠶家は取わけて忙しく相成候。

## 六月

降り續くる梅雨心までも腐るやうに覺え候。

梅雨鬱陶しく御座候。

暑き日に烈しく相成候。

梅雨漸く霽れすがくしく覺え申候。

連山綠濃かにして壯快を叫び出て候。

白衣の人多く相成候。

## 七月

暑氣甚しく相成候。

涼蔭讀書の好期。

綠翠滴るばかり。

炎熱堪へがたく殆ど釜中にあるの想いたし候。

日々汗まるけとなりて働さをり候。

## 八月

人家櫛比せる都の住居はわけて暑さ酷しく。  
我慢も出来かね候。

一夕立あらば蘇生せんものと空のみ打眺めてくらしをり候。

下宿屋樓上の暑さ御察し下さるべく候。

驟雨一掃苦熱を洗ひ去り候。

徒に空のみ眺めをり候へども一雨も無之殆ど堪へかね候。

暑中休暇も終りを告げんとするに暑さいや増し候。

## 九月

残暑猶堪へかね候。

朝夕は冷氣を覺え候。

朝夕は大いに暮しやすく相成候。

残暑實に凌ぎがたく御座候。

年豊かにして里祭賑はしく御座候。

月明かに蟲の音清く詩人の趣味いよく深かるべき頃と相成申候。

## 十月

秋冷の候。

冷氣朝夕に加はり凌ぎやすく相成候。

梧葉風なさに散りて秋をつげ候。

天高く馬肥ゆるの時。

燈火可親の時。

## 十一月

向寒の候。

收穫多忙の期節。

寒冷日につのり候。

日にく夜長と相成り。

打つとく快晴に小春日和の心地よさ。

満山霜に飽き紅葉錦を織り出し候。

山骨いよく秀て、水いよく清冽。

今朝は一面の霜にて雪かと疑はれ候。

東籬の菊花芳香を放ち後園の橘黄金色を輝かし候。  
長夜の候。

## 十二月

寒氣次第に相増し候。

極寒の候。

互寒の候。

寒威凜烈。

## 雜

餘日幾何もなく相成り候。

歳末の御多忙御察し申上候。

げに月日には關守なくいつしか年の暮と相成候。

窮陰餘日なし御繁忙御察し申上候。

平日は御無沙汰のみいたし。  
時下不順。

ふりみ降らずみの天氣。

毎日鬱陶しき天氣。

寒暖常なく頗る凌ぎにくく候。

久しく御無音に打過ぎ申譯もなき事に候。

#### 四、先方の起居伺候用語

御一同様御機嫌克く被爲入候や伺上候。

貴家益々御壯健に御揃ひの由奉南山候。

○益々御健勝 ○御勇健 ○御清安 ○御安泰 ○御清福 ○御多祥 ○

御健全。

○高堂愈御清穆に御起居被遊候段奉賀候。

○御無異に御暮しなされ候や。

○御清榮の段奉賀候。

○益々御多祥にて御勉強の御事何より目でたく存候。

○貴社益御繁榮賀し上げ候。

○いかに御くらしなされ候か伺上候。

- 御變りもなく御くらしなされ候や。
- 其の後の御安否伺ひたく候。
- 御子供衆にも御變りは無之候や。

### 五、自己の安否

- 拙宅一同無事に暮しをり候間乍憚御安心下さるべく候。
- 私方無恙暮し居り候間御放念下されたく候。
- 弊屋一同變りなく暮しをり候間御省慮下されたく候。

- 小生不相變碌々として無事に暮しをり候。
- 日々無事にて通學いたしをり候。
- 御蔭を以て頗る健全に日夕勉勵罷在候間御案じ下さるまじく候。
- 隠居をはじめ一同安泰に消光罷在候。

### 六、末尾語

- 先は樞要のみ申上げ候早々。
- 右御挨拶まで此の如くに御座候不一。

- 先は御近況御伺ひまで申上たく如此に候。
- 此段申上候頓首。
- 此段貴意を得たくそのため一筆申上候。
- 余は拜顔の上萬々可申上候早々不宣。
- 委細は面晤に譲り候。
- 委曲は後便に譲り候。
- 先は御安否御伺ひまで。
- 時下御自愛專一に祈り奉り候。

- 右御返事まで。
- 右貴酬まで。
- 早々不悉 ○敬具 ○謹言 ○不悉

### 自他の稱呼

先方の地位を考へて自己の代名詞を用ゐねば不知不識、失禮になることがある。まづ、友人間ならば僕、小生などを用ゐ、丁寧な言ふ場合には私などといふのがよろしい。先方を指すには友人には貴兄、君、貴君などがよ



母	父		
母	自 父	自	稱
御母上様	大 父 御 人 上 父 様 様 上 様	對	稱
老母	亡 家 老 父 父 父 父	自己關係者	他
母	父 父 父 <small>死なれた父</small>	先方關係者	稱
御母堂様	御 尊 御 御 父 大 尊 親 君 人 父 父 様		

ろしい。今、これを左に記してみませう。

次に、今一つ注意すべきことがある。それは、例へば、初めに貴君といひ中頃で大兄と改めたり貴兄といつたりするが如きことは、よくない事である。初めに貴君といつたら、その手紙全體へは貴君の語を用ゐるがよろしい。自分の事をいふ場合もそれと同じで、初めに僕と言つたら終まで僕を用ゐるがよろしい。

自他稱呼の表を次に掲げます。(中等作文教本抜摘)

妻	夫	父母
畧	自余	
す	分	
御そ其 な	略	
身た許	す	
賤荆家妻	略	
妻妻内	す	
御家内様 御令閨様 御内室様 御令室様 令夫 奥方 人様	御表 御良人 様	

伯叔	母父祖	併稱 兩親	
前項に準ず	自祖祖	兩父	私
	分母父	親母	
同	御祖父母様 御祖母様 御祖父様	御雙親様 御兩親様	母上様
同	祖祖祖 父	父兩	亡家母 母 <small>死なれ</small> 母
同	御祖父母様 御祖母様 御祖父様	御雙親様 御兩親様	御北堂君



居	知人
弊茅拙私	拙不不迂小
屋屋宅宅	者佞肖生生
尊貴尊御	貴貴雅貴學
堂家宅宅	殿下兄兄兄
	私同
	友
	達窓
	某 御同窓
	君 <small>學友のこと</small>

朋友	弟子	師	妹
僕私	小私	自余	
	子	分	
貴君	諸御 子(複數)	先	
君	身	生	
朋友	書門	先吾	妹
		師	
友人	生下	<small>た死なれ</small> 師	
御御	御	何々	御御
友朋	門	先生	妹妹
達友	弟		様君

宛名の下には

宛名の下に用ゐる詞

地
本府 本府 本郡 本郡 本村 本村 本區 本區 本町 本町
縣下 縣下 郡下 郡下 村內 村內 區內 區內 町內 町內
貴府 貴府 貴郡 貴郡 貴村 貴村 貴區 貴區 貴町 貴町
縣下 縣下 郡下 郡下 村內 村內 區內 區內 町內 町內

住	所
當當當	弊弊小弊弊
方所地	社舖店舍家
貴錦御	貴貴貴貴貴高
方地地	社肆店館邸堂

閣下、殿、様、御中などをつけます。

(例)東郷海軍大將閣下

文部大臣小松原英太郎殿

山中東造様

三井物産會社御中

右、閣下、殿などを使ふのにも先方の身分を考へて用ゐることが肝要であります。下男や下女に太吉閣下、おうめ閣下などと用ゐるならば、滑稽であります。

先生に出す場合には

高山先生

といふやうに書いてよろしい。先生の下へ様の字をつけるのは蛇足である。

脇付

宛名の脇に付けるのは

同上に用ゐるのは

執事、侍史

同上の人や同輩には

玉案下、机下、玉机下、硯北、坐下

父母には

膝下

母や姉や親しい間には

御許に

連名の場合には

各位

封筒の宛名の脇につける詞

他見を憚る場合

親展、直披、直封

急ぎの場合

至急、大急、急用

一見、受信者として安心せしむるには

平信、平安、無事

返信には

貴客、御返事、貴酬

(注意)はがきには親展親披などとかくことは入らぬ。

墨のき

ついでとる語の中間で墨をついで書くのは見苦しいものである。書きはじめたらば、語の切れるところまでは書きつゝはねばいけぬ。

年月日

手紙の終りには必ず明治何年何月何日といふ事を記すべきものである。

單に月日のみでは、後に至つて、何年の手紙であつたかといふことの必要な場合に、尠なからぬ手数を要することもあり、又、いくら手数をかけても不明に終ることもあります。状袋にも勿論書くべしである。

### 返信を認めるにいつての心得

人から手紙を受取つたならば、十ぶん、その手紙の主旨を了得してから、返事を認める心得を常に持つてゐなければいけぬ。



たとへば、用事が、三件あるならば、その三件について、遺漏なく書くべしであります。

又、手紙を受取つたならば、出来るだけ早く返信を出すのが禮に適つてをる。打捨て、おくなどは、誠によくないことである。

手紙を受取つたのは、人から呼びかけられた、と同様に心得ねばならぬ。

### 手紙の用紙

經濟のことばかりを思つて、あまり粗悪な紙を使用するなどは先方へ對し

て失禮になることは申すまでもなく、郵送の途中摩れ破れて肝腎の用事さへ辨じないこととなる。

賀状には可成だけ、紙質のよいのを選び、これに墨くろくくと豊かに書くがよろしい。

凶事の文は墨をやゝ淡くしてかくことに古からなつてをる。

## 作例

〔祝賀文〕

## 新年を賀す

日韓併合後第一回の新年は例年に比して事々物々活氣あるやうに見え、常盤を壽く門松さへ一入の元氣に相見え申候このめでたき新年を迎へ候生等の幸福は何に比へんやうもなく屠蘇の機嫌にいよく氣も心も勇み立ち本年こそは一大活動を試みんものと若水に流ひ清めし心に誓ひ申候貴兄にも

同様大いに期せられし事可有之と存候先は年首の御祝詞まで敬具

もて來つる是ぞ年玉心玉

(落款)

## 右返書

貴墨拜誦仕候新年といへば自然心のひき立ち候事は今更申すまでもなきことながら本年は格別にも勇み立つやうに覺え不知不識屠蘇を戴き過し候これも聖代に生れし幸福に外ならずと 兩陛下の萬歳を三唱し終つて一同相會して無事を祝し候今晚は天狗連の歌留多會相開き可申候間是非御出陣下

されたく先は御返詞まで敬具

大内は蓬萊山の委かな

(西)

### 新年を賀す

改曆の吉慶目出たく申納候先以て高堂御揃ひ御超歳被遊大賀之至りに奉存候降りて茅屋一同無事に馬齡を加へ候間御安心下されたく候舊年中は豚兒治儀わけて御世話に相成り難有奉謝候尙本年も不相變御眷顧の程希上候先は年甫の御祝詞まで如斯に御座候頓首謹言

蓬萊に聞かばや伊勢の初便

(西)

### 右返事

華墨拜見仕候御一同様には御無事に新年を御迎へ被遊候由欣賀の至りに存候御令息治様事御幼年とは乍申昨年比して本年は余程御成人遊ばされ大抵の事は御合點被成御言葉もよく御わかりに相成誠に未たのもしき事にて日々愚妻と共に羨ましがりをり候冬季やすみも過ぎ候はゞ早々御出かけ下さるやう御奨め下されたく候先は右御挨拶まで早々

獨有<sup>ヨク</sup>宜遊<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>ニ  
梅柳<sup>ウメ</sup>度<sup>ツ</sup>江春<sup>ナリ</sup>  
忽聞<sup>トク</sup>歌<sup>ノ</sup>古調<sup>ニ</sup>

備<sup>ニ</sup>驚<sup>ク</sup>物<sup>ノ</sup>候<sup>ニ</sup>新<sup>ナル</sup>  
淑氣<sup>ス</sup>催<sup>シ</sup>黃鳥<sup>ニ</sup>  
歸思<sup>キ</sup>欲<sup>ク</sup>沾<sup>レ</sup>巾<sup>ニ</sup>

雲霞<sup>クモ</sup>出<sup>レ</sup>海曙<sup>ニ</sup>  
晴光<sup>ハ</sup>轉<sup>ス</sup>綠蘋<sup>ニ</sup>  
(社書元)

### 婚姻を祝す

拜啓春暖之候貴家御揃ひ益御健勝奉賀候さて此度は御良縁相整ひ昨夜華燭の典御舉行被遊候由關雎の御樂み幾久しく御祝ひ申上候御一同様御満悦の程いかばかりかと奉察候鏗節一連御祝の印までに進上仕たく御受納下されたく候謹言

關關<sup>カカ</sup>雎<sup>ス</sup>鳩<sup>ト</sup>、在<sup>リ</sup>河<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>洲<sup>ニ</sup>、窈窕<sup>ヨウテウ</sup>淑<sup>ク</sup>女<sup>ニ</sup>、君子<sup>ノ</sup>好<sup>ム</sup>逵<sup>ニ</sup>。

⑤

### 右返詞

御手紙拜見仕候此度結婚につき御祝ひに預り痛入候實は未だ成功もせざるに迎妻などは早さに過ぐる恐れも有之候へども老親の手助けとも可相成且は一家の整理上不得止かゝる始末と相成候次第にて赤面の至りに御座候明日は御近づき御願ひのため午後五時より粗酒一献さし上げたく候間御多忙中御氣の毒ながら御來車願たく候先は御挨拶まで謹言

## 試験及第を祝す

只今官報にて承知仕候第一高等学校入學試験に首尾克く御登第何よりめて  
 たく不覺快哉を叫び申候競争者の多き中を切抜けられ候は宇治川の先陣よ  
 りもむづかしかるべくすべての學生はこの關門を通過することを淵瀬の界  
 とまで言ひ囃しをすることに御座候へば貴兄の御心中幾重にも奉察候後刻參  
 上御祝ひ申たく不取敢右申述候 吉田君萬歳

## 右返事

未だ官報は見ず何も手につかず徒に茫然として縁に出て、空ゆく雲を眺め  
 をる折柄御書面拜受初めて登第せしことを知り夢の心地仕候小生の如き不  
 勉強家はとて六ヶしからんとは期しをり候へども自分は兎も角親兄弟さ  
 ては親友に對してうまくゆかばよからんものをとそれとなく念じをりし甲  
 斐も漸く顯れしこととして嬉しく存候入學後は一層の勉強いたし平素の御恩  
 に酬い可申候先は御返事まで早々

### 中學校卒業を祝す

一書拜呈貴兄の中學校に御入學なされしはまた數日前のやうに覺え候にはや五ヶ年の星霜を無事に経過せられ好成绩にて御卒業なされ候由御當人はさることながら御兩親様も重荷の幾分を卸されしこと、御よろこび申上候併し爰に御祝詞を申上ぐると共にこの際申上げおきたきことは前途のことにて御座候苟も小成に安んずるが如きこと有之候てはこれ迄の苦辛も水の泡と消え果て可申候へば御弛みなく御奮勵被成下度袴一着御祝の微意迄に

進上仕候頓首

### 同返事

御書面拜見仕候小生辛うじて中學校卒業致し候とて御祝ひとして重寶なる品御惠與被下且つ御懇篤なる御教訓を蒙り御厚情深く感佩仕候御諭の如く中學校は漸く普通學の一斑を修得せしに過ぎず候へばこれより愈々本舞臺に登るべき覺悟必要に有之勇猛精進いたしあまり後れを取らぬやう勵み申すべく候今日は國許より叔母見物にまゐりをり案内のため只今より淺草へ

出かけをり候間失禮いたし明日は是非參上御話承りたく御返辭かたく御  
たのみ申置候頓首

艱難、爾ヲ玉ニス

### 病氣全快を祝す

御入院中はとんと御伺ひも得不仕誠に相濟まぬこと、申しながらその日の  
ことに追はれ御無沙汰致し候承り候へば昨日御退院被成候由この上もなき  
目出たきことに御座候御兩親様も嘸御悦び遊ばされしこと、乍蔭奉察候後

刻參覽御祝ひ可申候へども鯛一籠使に持たせ候御笑留下されたく候敬具

### 右返事

御手紙ありがたく拜見仕候入院中は御多忙にも拘らず毎々御尋ね下され御  
厚誼奉謝候以御蔭漸く退院いたし久々にて歸宅仕候處庭の荒れ果てたる籬  
の壊れたるなど我家かと怪まるゝ程にて候御承知の通りこの病氣に罹りし  
ものは十中八九までは命をとらるゝとのことに候へば少からず心配仕候ひ  
しが醫師の手當もよく運のつよかりしにや命拾ひいたし候ことはまるで夢

の心地仕候御心にかげられ御祝ひとして鮮魚澤山誠に難有存候不遠御宅迄  
位は歩行も相叶ひ可申と存候へばぶらく御邪魔可仕候先は右貴答まで早  
々

病從<sub>レ</sub>口入、禍從<sub>レ</sub>口出

### 入學を賀す

拜呈御長男様事學齡に達せられ御入學被成候由御性質も活潑にあらせられ  
既に幼稚園にをらるゝ頃より筆墨などに親しまれ候やに聞居候へば御上達

も早かるべく御一同様の御歡びいかばかりかと奉察候ノトブック五冊鉛  
筆二ダース御よろこびの印までに進上仕候御叱留下され候はゞ本懐に御座  
候早々

玉不<sub>レ</sub>琢<sub>レ</sub>不成<sub>レ</sub>器、人<sub>不</sub>學<sub>不</sub>知<sub>レ</sub>道

### 右返辭

芳墨拜誦仕候豚兒入學致し候とて御叮嚀に御祝ひ下され恐入候宅にありて  
は朝から晩まで姉や弟と喧嘩のみ致しをり殆ど手のつけ様もなく困りをり



候ひしが漸く年齢に達し登校相かなふこと、相成まづ一安心仕候位のこと  
に候へばかれこれ御褒め下されその上結構なる品とり揃へ御贈り下され何  
共御禮の申様も無御座候早速本人に相見せ候處大喜びいたし殊に表紙の繪  
が氣に入りしとて抱へとり妹等には見せも致さず候先は御返事まで早々

### 友人の高等商業學校に入學せしを祝す

今日は朝から何となう心地がよく飯の味も常より旨い何かめでたいことが  
ある前兆かとおもつてる折和田君がやつて来て「君、中村君萬歳だ占めた

よ」と言ふのに驚かされたがその時の僕の胸は言ひやうのない動悸を催し  
た志願者の夥しいことは諸官立學校中第一等と言はれるだけあつて百に對  
する四乃至五位しか入學が出来ずそれも一度や二度位は誰でも辛抱するが  
三回四回となつて尙目的を達せられないとなると自暴自棄して遂には無頼  
漢と成り果て親や兄弟に心配をさせ朋友からは指彈せられて一身を滅すも  
のが随分世には例のあることであるにも關らず君の如く一回の失敗もしな  
いて遂行せられたのは目出たいといはうか運ぶよいといはうか否、運のつ  
よいよわいといふことは怠惰者の口實で勉強者の口にするのも思ま／＼し

く感ずるのである君の今日あるは所謂成るの日になるにあらずして其の胚胎する所は久しいのである中學に居られた頃から既に其の勉勵は衆を擢んでてをられたことは常々目撃してゐたのである君は胸中既に成算あつて見事に合格せられたが君の友人は随分羨んでをるものも多いだらう君の御両親様も嘸御歡びなされたであらう僕の如きものまでも嬉しさに堪へないのである明午後五時から親友なる九鬼、三品、熱田、高井、吉岡の五君と僕とが主人側となつて君を御客様として一大祝宴を張り以て登第を賀し併せて前途を祝さうと欲するのである萬障を繰り合せて本郷は春木町二丁目十

二番地雲龍館まで来てくれ給へ電車は本郷三丁目まで下りて三枝の牛屋に於いて右へまがり十五六間先の左側である。

### 右返事

御親切な御手紙ありがたう辛うじて高商へ入學したとて大層な御褒めに預つて御返辭のしかたに窮したのであるが今回の及第は全く僥倖で運り合せがよかつたといふより外は無いのであるにも關らず僕のために特に一大祝宴を開いて下さるとはまるで夢の心地がして現とも覺えないが君の筆跡の

歴然たるをみて夢でないと思つたのである何はさて置き明日は時刻までには必ず雲龍館とやら縁起のよいハウスへ出掛けることとする委細のことは御目にかゝつてからのこと九鬼君其他諸君へよろしく

失敬

〔見舞門〕

### 留守見舞

拜啓御父君には朝鮮御視察のため俄に御出立なされ候由御留守中は定めし御寂しき事と御察し申上候早速御見舞にも参堂仕たく候處生憎次男事昨日

より發熱いたし手がかり候ゆゑ心ならずも失禮致しをり候醫師はさしたることもなき故一兩日経過せば全快すべしと申され候故よくなり次第に御伺ひ可申候この品誠に御耻かしきものながら御子様方に御あげ下されたく御様子伺ひの心ばかりにて候なほ御目に懸りよろづ申すべく候かしこ

### 右返事

御狀拜見御次男様御病氣の由いかゞの御様子に候かさらに存じ不申御伺ひも致さず打過し候段御宥恕下されたく候御取込にも關らず留守御見舞と

して小供へ何よりの品御めぐみ下され誠に難有奉謝候かの地の用向はあまり大したることにも無之候へば不遠歸京可仕様申して参り候こと故御心配下さるまじく候かへり次第御伺ひ仕り御禮可申上候時節柄不順に候へば御手常專一に奉祈候かしこ

留守事に葉守の神のほたへ哉

かつらきの神は夜深き旅出哉

(舞)

(舞)

## 寒中見舞

久しく御起居御伺ひ不申失禮に流れ候處御一同様御變りもなく被爲在候や今年の寒氣は例年になき嚴しさにて共同水道の栓も氷りつめらるゝこと日々にて長屋住居のものゝ迷惑は一通りならず候獨り東都のみにてはなく鎌倉江の島さへ暖爐なしては暮されぬとの事に候まして寒帯と稱せらるゝ御地の寒さは如何ばかりかと日々御噂申をり候御別條は無之候や御子様方は何如に候かこの鴨は昨日浦和方面へ出かけ手に入れ申候ものにて小生にとりては大に自慢に御座候間御目に懸け申候先は御左右御伺ひまで呈一書候折角御自愛のほど祈り上候早々不一

初冬霞

みやまより外山に冬やいそくらん

(節)

正木のかつらあられちるなり

## 右返事

玉章拜誦仕候私方よりも非常の御無音申譯無之候御渾家御揃ひにて御暮しの由目出たく存候拙宅幸に打揃ひ暮し居候間御安心被下度候内地は例年になき寒さとの事新聞紙にても承りをり候が御手紙に接し更に驚き申候當地は珍しく本年は暖かにて隠居などは特に喜びをり候午後よりはストーブの

火のなきことさへ氣づかずにとることで度々有之候久しく住める人の話に本年ほど雪も少なくて暖かなることは數十年稀なりとの事に御座候へば御心配下さるまじく候尙又御贈與下されし鴨誠に珍しく殊に御打止められしと承り一層の味を覺え申候御腕前は昨年比して餘程御上達被遊候事と遙に祝意を表し候かの羽毛は宛然生きたるが如く光澤いかにもよろしく候へば長男は剝製にして書齋を飾らんと樂みをり候先は取急ぎ御返事までかくの如くに候

一としきり矢種の盡くるあられかな

(節)

石に詩を題して過ぐるかれ野かな

(念)

### 洪水見舞

降りつゞく雨にて荒川の堤防も既に危険大橋も流失せんとしつゝありなど  
耳にいたす毎に御宅はいかにおはすかと家内どもと案じをり候處只今夕刊  
にて御地一面の海と化し悲慘目もあてられぬと承り驚愕仕候御子様方はい  
かに遊ばされ候か御隠居様はいかに御當惑の程幾重にも奉察候定めし萬  
事に不自由に候はん不取敢清水一樽握飯少々持參爲致候間御受納下された

く御子様だけなりともこのものに負はせ一時拙宅まで御遣し下されたく決  
して御遠慮には不及候亂りがき御判讀祈上候早々

### 右返事

拜復四五年前の大水には當地までは浸さざりしため油断いたしをり候處俄  
然瞬間にして濁水に包圍せられ一孤島の形勢と變じ随分狼狽仕候向も有之  
候由聞込み申候御承知の通り拙宅は他より幾分か高きため門前までまゐり  
離坐敷のみ床上三四尺に達し候併し一步出づるに致しても船ならては叶ひ

不申その不便言語に絶え申候御心にかげられ種々御贈與被下御禮申上候一  
番に不自由を感じしは供水に御座候井戸は悉く没してその所在さへわから  
ぬ程に候へば官より支給せらるゝ僅かのものにて間に合せをり候次第その  
他日用品の買入に困るのみにてはなく小兒は室外に出られぬため大いに退  
屈いたし困り果て候折柄ゆゑ御言葉に甘え御使者に負はせ遣し候間少し減  
水するまで御世話願たく候先は取急ぎ御返事まで

家も木も皆浮草とさそはるゝ

(手廻)

### 暑中見舞

堪へられざる暑さにて候御障り無く居らせられ候や御伺ひ申上候小生事近  
日中に鹽原へまゐり避暑旁著述に就事いたす考へに御座候昨年の此頃は箱  
根底倉なる蔭屋にて御一緒に暮し日の経過いたすことさへ打忘れをりしこ  
とを追懐いたし感慨に不堪候ビール一打聊か暑中御見舞の印までに進じ候  
もし御手透に候はゞ出立前までに御遊來下されたく候早々

避暑の地に行逢ふ人や見知顔

(手廻)

## 右返事

御手紙拜見仕候如仰この頃の暑さは實に凌ぎがたく候へども御變りもなく被爲入候との事目出たく存候昨年は箱根に避暑致し殆ど夏を忘れて暮し候ひしが本年は家族だけ大磯へ参ることに相定め小生は留守番を仰せつけられ大閉口罷在候貴兄には鹽原へ御避暑旁御著述なさるゝ御豫定の由羨望に不堪候御宿所御定めに相成候はゞ御一報被下度二三日御邪魔可仕候なほ又暑中御見舞として麥酒澤山御惠送被下忝く奉存候浴衣地二反聊御禮の印ま

てに進上仕度御叱留下されたく候

水古き深田に苗のみどりかな

ざわくと眞菰刈るなり水の中

高どのの灯影に沈む若葉かな

(御禮)

(作書)

(御禮)

## 残暑見舞

秋に入りしとはたゞ名ばかりにて土用よりも増される此頃の暑さ御一同様には御起居いかゞに候か新聞によれば諸處によからぬ病氣流行いたし候由大暑の折には反つてこの種の疾病に罹るもの妙さに例年この頃に至る毎に



多かるは油断より起ること、被存候御一同様におかせられても何卒十分に御注意被成たく候この品九州へ歸省いたしをりし服部氏より到來仕候あまり珍しくおもはれ候まゝ御福分いたし候先は右殘暑御伺ひまで早々

### 右返事

御書面拜見仕候如仰この頃のおつさは土用にも増されるやうに覺え堪へかね申候御家族様には御障りもなう被爲入候由大慶に奉存候私方も御かげにて一同無事に暮しをり候間御安心下されたく候此頃は疫病流行の兆候有之

候由新聞にもちら／＼相見え用心罷在候服部氏歸省の土産御福分下され御厚誼奉謝候一同珍しく拜味仕候先は御返事までかくの如くに候不日參上よろづ申すべく候頓首

涼しきは秋やかよひて初瀬川

ふる川への杉の下かげ

### 寒中見舞

拜啓仕候久しく御無音に打過ぎ申譯無之候兩三日の寒氣は殆ど堪へがたく

御座候處御安否如何に

御承知の通り當地のから風は身に沁み込むやうに覺え日々の登校もいやに相成申候目下第二學期試験中のことゝて少しの弛みも出來不申仕度勿々電車停留場まで駆けつけ満員の車に飛びこみ我ながら危険と思ふ時もある候これに慣れてはさほどにも苦に成らず候へども靴穿きのつめたさこれには一番閉口仕候生徒の控室には暖爐の設けは僅に一個所のみ候へばその難沓殆ど縁日の如く掏兒の用心掏兒の用心と言つては人を笑はせるものもあるほどに候併し暖かに着て登校するに寒いのつめたいのとは贅澤極まる

ことに候南極探險に出かくる人すら有之候にかゝることを申すは女々しきことにて候君の方も目下やはり試験に候や否や、私方は本月二十日かぎりにて相済み可申候故その内に御伺ひ可致候  
御隠居様はいかゞ御くらし被遊候か定めし御困りなさるゝことゝ存じ候母よりも宜しう申上げよとのことに候へば申添へ候  
昨年龜戸へ御同行致し候節求めし梅本年は澤山蓄をつけ申候近々中に書齋に飾付け可申候間御覽に御出て下されたく今より豫約申上候先は右御伺ひまで勿々不宣

冬枯はさそむさしののひろくと

奥底しれぬさむさなるらん

(五七)

## 右返事

筑波嶺嵐身にも骨にも徹るこの頃の寒さにも御變りなく日々御通學の由目出たく存候私も毎朝々々隅田の川風を身に沁ませつゝ情心を勵まし登校罷在候間御安心下されたく候

君の方も目下第二學期試験の由御同様に御座候昨日の如きは第一ばんに忘

なる代数と三角随分頭を痛め申候平日勉勵しておかばいざ鎌倉といふ場合に何の苦もなかるべきものと常々先生からも言はれ自分にてても了解して居りながら人間の弱點と申さんかその際になるまで氣を入れて勉強せず間際に至つて周章狼狽して復習いたし候故好結果を得られずいつも辛うじて通過いたし候やうにて恥かしき次第に候今日は得意の英文法と會話とにて候ひきこれは満點のつもりに候

君は毎朝電車の飛乗りにて御出校の由危険なることをしたまふこと哉隱居に話し候處馬鹿なことをするな怪我でもしたら取り返しがつかないのにと

驚きをられ候今後は少し早く起きられて緩々御乗車然るべしと存候  
 隠居もこの頃は太變御丈夫になられ毎朝日當りよき所にて水仙や梅の世話  
 などいたしをられ候また夜分は弟妹を前に坐らせて昔の自慢話致し居られ  
 候

龜戸にて御求めの梅當年は好成绩のよし全く御手入のよかりしことと存候  
 試験のすみ次第に御伺ひ致し拜見可仕候乍末御一同様へよろしく御傳へ下  
 されたく候早々

日頃にくむ鴉の雪のあした哉

(巻終)

### 火事見舞

驚き入候貴家御全焼なされ候由只今出入の酒屋小僧より聞き込み戰慄仕候  
 昨夜の風は實に此頃中稀なりし故家等族と共に今晚もし出火せば瞬間に數  
 百軒は嘗めつくされ候はんなど申して休み候ひき風向のためにはや警鐘も耳  
 に入らず少しも存ぜざりしにこの凶報を承り御氣の毒に不堪候御老母様に  
 は御怪我もあらせられず候や第一に承りたく候  
 御道具類は少しにても御出しに相成り候や

御一同様別條のことは無之候やこのものに御聞かせ下されたく候さしあたり酒一樽漬物一樽御見舞までに進上仕候

來客の歸られ次第御伺ひいたすべく候先は右取急ぎ要用のみ

水にうつる火事は濠端通り哉

(字想)

## 右返事

不運は何處までも追ひつきをり候こととして移轉後漸く落ちつきまづ安心と思ひ新年には一儲けせんと思ひ店の飾つけなどに尠からぬ費用を投じたり

しも全く烟と化し去り只茫然と焼址を打眺めをるのみに候一軒先きの小間物屋まで燃延びたる頃家具の重なるものだけは運び出し候へども殆ど手もつけられざる有様と相成申候併老人を初め一同怪我とては不致何れも無事に立退き候間御安心下されたく尙又御見舞として何よりの品取揃へ御遣し被下難有存候何れ御目に懸りて委しく可申候不一

火事の鐘に雨戸明くれば月夜かな

森の上に江戸の火事見ゆ夜の曇

(字想)

(句)

## 〔誘引門〕

誘引文は受信者をして遊意勃々たらしめることに注意して筆をとることが必要である。

## 梅見に誘ふ

いつも来る花賣りの翁に開きて候木下川の梅二三分蕾を破り馥郁たる清香  
 鼻を穿ち清爽骨に徹するの感有之候と御遊賞の氣はをはずや明日午後〇  
 時半兩國停車場會合とし行いて疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏の句を味  
 はずや由來風流は寒いものと相場の定まりをること故少々の寒さは御厭ひ  
 なく御賛同下されたく香茗を啜り駄菓子を口にしつゝ名句を吐くも一興に  
 候はずや同志は九鬼五三郎三品清助の二君と僕

雪とのみあやまたれしを梅の花

くれなるにさへ匂ひぬるかな

(元輔)

## 右返事

風流なる御催大賛成に候木下川の梅は久しく耳にしながら空しく今日に及  
 び候近頃閉戸居士となりすまし一步も關を越えず無聊にのみ消光罷在候折  
 柄嬉しさ一層に候必ず時刻迄には定めの場合にまゐり申すべく候御返事ま  
 て

ふりかゝる梢の雪の朝かけに

くれなゐうすき梅のはつ花

(元題)

### 花見に誘ふ

各停車場に小金井觀櫻の割引と時間表とを掲げて遊行をすゝめをり候  
引つゞける日本晴の昨今一室に閉居せんことは佐保姫の御咎めも恐ろしく  
候はずや沿道の景を賞しつゝわざと徒歩にて参りたく御同行如何御賛成は  
無論の事とは存候へども一寸驚かし申候夜半に嵐の吹かぬものは明日午

前五時新橋停車場會合の事御便當は御隨意

錢湯で上野の花の噂かな

京は九萬九千群衆の花見かな

(元題)

(佐保)

### 右返事

來諭謹んで承り候

花見の御催大賛成に御座候汽車の混雜は堪へがたく候へば徒歩と定められ  
しこと至極宜しく候途すがら出まかせの事など語りつゝゆくはまた興味の

盡きざるものにて候久々にて田舎の風光を賞し色黒き饅頭にて舌鼓うた人も  
 樂みの一なるべく咲きも残らずの眞盛を賞せんこと定めし愉快に候はん日  
 の暮るゝが待ち遠にて候敬具

石高な都よ花の戻り足

(雑詩)

### 郊外散歩に誘ふ

習々たる春風は爛々たる柳枝を揺動せしめ翩々たる蝴蝶庭に狂ひをり候こ  
 の好期を逸しては郊外散歩はまたと出来申さざるべしと存候明朝未明より

曉風にそよ吹かれつゝ都門を辭し筈を目黒方面に曳かんは如何に詩趣は津  
 やとして湧出すべく書題は立どころに得られ候はん行厨は各自持參の事と  
 し歸路は新宿の芳香園に立寄り茗茗を喫し名物の團子に飢をしのぎ談話會  
 を開かんも一興に候はずや御返事待上候

案内者も我等もぬれて花の雨

(五絶)

### 右返事

打つゞく快晴に精神もとんと落つき不申随つて讀書も身に入らずいかゞせ



んと樂じをりし折柄御手紙に接し嬉しくこそ候へ

電車も動き出さぬ時刻に出發とのこと至極賛成に御座候塵多き巷にのみ生活いたしをり候ては心身のためよからぬことゝは知りつゝも單身にて散歩もあまり興味の多からぬこと故よき友もがなと常々おもひをり候ひきされば何條いなみ申すべき奮つて加盟可仕幸ひ畫の宿題も有之候故其の用意にて出發いたすべくよろづは拜面の折に

花盛り山は日頃の朝ぼらけ

(芭蕉)

三味線に樽をかけたる花見哉

(于菟)

ふつくくと彼岸櫻のつほみかな

(于菟)

### 菖蒲見に誘ふ

稍々暑さを覺え候御起居如何野生幸に無異御放念下されたく候昨年御約束いたしながら差支のため中止となりし菖蒲見の好時節と相成候堀切は昨今が見頃なりと人傳に承り候明日の日曜日を幸ひ午後より御散歩旁御見物はいかゞ墨水にて明日は高等商業學校學生のポートルス有之候との事是非御同伴願ひたくもしまた機會を逸せば遺憾に候間御用御繰合せよき御返事下されたく待居候早々

## 右返事

御はがき拜見仕候苗蒲見に御誘ひ下され難有存候いかにも昨年は時期を失ひ遺憾に存候ひき今年亦其の轍を履まばあまり口惜しき事に候へば明日は何を措きてても御件可仕候ことにポートルレースの見物有之候との事久しくこの種の競技を見ざること故樂しみに御座候只今友人田中元輔君來合せをり右相語り候處是非仲間入したしとのことに候へば同道にて正午御宅まで伺ひ可申御まぢ下されたく候右御返事まで早々不宣

優しくも苗蒲咲きけり木曾の山  
杜若似たりや似たり水のかげ

(子規)  
(芭蕉)

## 菊見に誘ふ

只今渥美君より御はがき着拜見仕候處丹精を凝らし、甲斐ありて本年は思ひしよりもすべて大輪に咲き揃ひ兩三日が見頃ゆゑ培養の苦心談も聞いて貰ひたい田舎料理を差上げるとのこと御承知の通り同君は菊の培養に一方ならぬ腐心いたしをらるゝこと定めし見事に候はん小生一人にて出掛け申

すは何となく寂しき心地仕候へば御一緒に参りたく貴兄も御出て下さらば  
 嘸喜ばれ候はんと存候明日正午よりまゐり候ては如何御差支あらば明後日  
 の正午にいたしてもよろしく御都合如何折返し御返事下されたく待居候

いざよひのいづれか今朝に残る菊

(西菊)

紙燭して色失なへる黄菊かな

(黄菊)

### 右返事

菊見に御誘引下され忝く存候渥美君の菊の培養に御熱心なることはかねて

より聞及びをり候へば一度は拜見の榮を得たきものと念じ居り候こと故是  
 非御伴仕たく時刻までには御宅まで伺ひ可申候間御まら下されたく先は不  
 取敢御返事まで早々不一

白菊や庭にあまりて島まで

(白菊)

白菊やかゝるめてたき色はなくて

(白菊)

### 紅葉見に誘ふ

新聞紙の報によれば鹽原の紅葉は爰一週間前後が見頃なりとのことに御座

候晴天も久しく打つゞき候ことゆゑ天氣工合の變らぬ内明日にも一番列車にて出掛けたく宿は小生友人の紹介にて福渡戸の磯屋に極めたくこゝは本年春の新築にて三階より成り見晴もよく客の待遇も町重なりとのことに御座候御賛成に候はゞ明日午前五時半上野驛に御參集下されたく同行者は遠慮の入らぬものみに御座候先は御誘ひまで走り書きにて失禮

紅葉見や用意かしこき傘二本

(持)

騎馬一人従者五六人紅葉狩り

(子想)

## 右返事

觀楓の名所として其の名噴々たる鹽原へ御出かけの由御誘ひ下され忝く存候昨日彼の地よりまゐりしものゝ話によれば満山悉く紅葉して恰も錦繡をめぐらしたるが如く其の美觀實に名狀しがたく荏苒としてこの機を逸せば或は風雨に暴され候はんも計りがたく候へば一日も早く出かけられよとのことに候へば明朝必ず御定めの間まで上野驛にまゐり可申候委しきことは汽車中のたのしみに残し申候御返事まで早々不具

紅葉見え瀧見え茶屋の床几哉

(子想)

〔贈皇門〕

赤心をこめて認め受信ををして其赤心のあることをしらしむること肝要なり。

### 餞別品をおくるに添へて遣す

拜呈御長男様いよ／＼近日中に米國へ向け御出發遊ばさるゝ由御奮發の程感服仕候たゞ御一人の御愛兒を遠く海山を距てし異國へ御遣しになる御親子の御決心はかのいつまでも膝下を離し得て懦弱なる人間に陥らしむる父兄の好模範と相成可申この親ありてこの兒ありと申すべしと存候乍失禮別封一包聊か餞別のしるしまてに進上仕たく御受納下さらば満足に御座候何

れ後刻參堂御暇乞可申上候早々

此の寒き君に別るゝあしたより

(子四)

### 右返事

拜復愚息渡米のこと御耳に達し御叮嚀なる御挨拶に預りかつ御餞別御惠み下され恐入候御承知の如く今のわかきものは米國位へまゐることは隣家へまゐる程にもひをり候こととして親までも其の氣になり一向かまひ不申反つて他人様よりいろ／＼御注意など蒙りをる様なる始末に御座候同行者の

都合にて三四日延引仕候ことに相成候間それまでに御暇乞に参らせ申すべく混雑中亂筆にて御返答まで早々不一

酔ぎめの車に乗れば足塞し

(手廻)

### 雑誌をおくる

田園生活は定めし呑氣に候はんこの頃の御起居如何に候か小生は日々の學科に追はれ忙しく暮しをり候昨晚琴風君松月君竹露君の三氏來訪せられ四方山の談より轉じて貴兄のことに及び候貴兄がよく賢問の矢を放ちし數學

教師天狗殿は先月末栃木縣の山奥より招かれ轉任仕候職員連の送別會は上野の清風亭にて行はれし由僕等は與らざることながら通信子の報ずる處に御座候其後別段異動無之候先便にて新刊雜誌送れとのことに候ひしゆゑ散歩の折毎に注意仕候へども更に嶄新なるものは出で不申御満足を與へかね殆ど失望罷在候處今日「天下之青年」といふ活氣ある雜誌初刊手に入り候故不取敢御送り申上候御氣に入らば毎號御送り可致候御覽の通執筆者は名ある人のみに候へば多少名論卓説も有之候はんと存候先は右まで早々

## 右返事

田舎に塾居してよりはや二ヶ年と相成申候閑静なりと喜びしは當座のこと  
 此頃にてはまた花の都戀しく相成申候電車の轟々たるを耳にせては社會よ  
 り遅れゆく心地仕り不快に不堪候加ふるに談合の友人なく御承知の如く前  
 後左右山と川とにて圍まれたる僻地樂むものもなく遊ぶ材料もなく東京友  
 人の通信を無二の慰安といたしをり候折柄新刊雜誌御惠送下され嬉しく存  
 候

天狗先生に喧嘩腰にて質問いたし候程の元氣は昨今少しもなく大いに意氣  
 銷沈仕候同先生には田舎へ御轉任被成候由學校のため惜しきことかと存候  
 乍憚琴風松月竹露の三兄へも宜しく御傳言下されたく候  
 小包にて密柑一籠進上仕候御退屈の折に御上り下されたく候謹言

## 注文品をおくる

毎々御引立を蒙り難有仕合に御座候御注文の書籍漸く相揃ひ候間左の通り  
 御送附申上候御改めの上御受取下されたく郵税だけは弊店の持と可致候

- 一、大日本地理明細圖 金一圓五十錢
- 一、探險實談 金八十錢
- 一、世界一周談 金五十錢
- 一、高等作文教範 金四十錢
- 一、萬國名所圖繪 金貳圓五十錢
- 一、大家名文集 金一圓

合計金六圓七十錢也

右二割引

品物と御引換へにて御送り下されたく候也

差引金五圓三十四錢

右返事

注文の書籍六種正に受取申候代金五圓三十四錢爲替にて差出候間御受取下  
さるべく候右御返事まで早々

梅花を送る



降り積る白砂の雪をいとはて咲き初めし梅の花鶯こそ未だちとづれされ  
 かをりはいともゆかしうこそ候へおのれのみ打ながめんもさすがに惜しく  
 候へば蕾のをむごと一枝御目に向け申候御机のあたりへ御挿み下さらばこ  
 よなき幸になん かしこ

鶯の身をさかさまに初音哉

(五)

### 右返事

御文うれしう拜見し侍りぬ

堪へがたきこの頃の寒さをもいとはて文のむさにいよく御いそしみ遊ば  
 され候こといともいともめでたくこそ候へ  
 御庭前の梅をしげもなう伐り採らせたまひわざく御めぐみ下されまこと  
 に嬉しく存じ候早速花籠に挿しうち眺め申候に俄に春めきたる心地仕候折  
 返し御返事まであらしくかしこ

鶯のなけば何やらなつかしう

(五)

### 桃花をおくる

そとろありきせんとしてあさまだきより由子の君秋子の君と共に兩國より汽車にて市川にもものし侍り折り取りしこの桃の花御目にかけて申候雑沓せし汽車の中にもしや人に散らされはせずやと案じつゝ持て來しこの花よ御許のみ手にふれ花瓶に挿さるればわらはのうれしさのみならでこの花も面目に存じ候はんよろづはたいめにゆづりまづはあらく

誰か又みて忍ぶらん山がつの

そのふの桃の花のよそめを

(後編)

## 右返事

市川の桃見に御出て遊ばされ候由羨しうこそ御親切に色香よき二枝三枝御土産として下されさながらその場へ参りし心地仕り候早速昨日求め來し一輪さしに活け申候處實に愉快の感を起し喜びをり候御ひまの折にはちと御出かけ下されたく在米の兄より送り越しゝ寫真など御目にかけて申すべく候先は御返しまであらくかしこ

けふごとに酒にうかべてのむ人や

三千よの草の名にいはふらん

(後編)

## 朝貌の種子をおくる

俄に園藝趣味熱に浮かされし君よりの御注文を聞捨にはならじと秘藏の種子十種進上仕候小生の天狗なるか否かは花を見ぬまでは御疑惑の帷中に埋没せしめおかるべく候併し培養法の巧拙は與つて大いに力あること故別冊御參考に供へ候不一

朝顔の花に啼きゆく蚊のよわり

(芭蕉)

## 右返事

園藝熱に浮かされしとの御冷評少く耳いたく候何はともあれ御秘藏の種子

取交へ御惠送下され多謝々々諸家培養の方を斟酌し一大研究を積み敏腕の程御覽に入れ可申細工は粒々仕上を御覽成さるべく御禮旁御返事まで

蘇や繪の具にじんて繪にならず

(子規)

朝顔やあてありさうに伸びる莖

(芭蕉)

蘇やいろくくに咲いて皆萎む

(芭蕉)

叩けども朝顔さいて空家なり

(芭蕉)

## 〔報知門〕

病氣を報知す

祖父儀昨夕より俄に發熱いたし時々苦しげなる咳をいたし候故早速醫師の來診を請ひ候處こは容易ならず注意怠ること勿れと申され一同驚居候例の持病ならば御知らせも致さぬ考に有之候へども右様の次第につき不取敢御知らせ申上候山中様へも乍憚御通知下されたく取急ぎ御しらせまで

### 右返事

御隱居様御大病の由驚入候平日は至つて御達者に被爲在候故格別にも病氣はさつくまゐりしこと、被考候即刻參上御見舞可申上候何分にも御老體の

こと故御油断なく御手當下されたく候乍粗末鶏卵一箱御使に托しさし上候  
早々

### 死去を知らず

祖父儀臥床中は毎々御見舞下され御禮申上候種々手を盡し候へども其の効なく今朝五時半眠るが如く事され申候間不取敢御報知申上候御手傳も頼み  
たき事有之候まゝこの使と共に御こし下されたく御たのみ申上候

死去を通知するはがき文は黒棒を以て圍むこと近來行はる。會葬者に對しての禮狀も然り。

## 死去報知のはがき

誰事永々病氣中の處藥石其の効なく某月某日死去仕候此段御通知申上候  
 追つて某日午後一時自宅出棺青山齋場において神葬式相營み可申候  
 放鳥生花等は遺言により御断り申上候

死或重<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>泰山<sup>ニ</sup>或輕<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>鴻毛<sup>ニ</sup>

(可馬邊)

## 起居報知

一別以來は御無沙汰に打過ぎ申譯無之候御家族様御機嫌いかゞに候御伺ひ  
 申上候第二學期試験の成績甚だ不良なりしたため主任教師より第二學期には  
 十分勉勵し耻辱を雪げと懇々御教訓を蒙り候ゆゑ餘念なく奮勵罷在心なら  
 ずも御無音と相成申候御蔭にて前期に比して成績も良好なりとて此度は褒  
 められ申候別紙日光へ修學旅行いたし候節寫生仕候ものに御座候元來拙き  
 上に時間も少なくて念を入ること叶はず見苦しきものながら太郎君にさ  
 し上げたく候先は右御起居御伺ひ旁早々

出入起居、罔<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>欲<sup>ク</sup>

(香理)

## 右返事

御手紙拜見仕候御無事にて御勉強の由何より結構に御座候私方も一同無事に暮しをり候間御安心下さるべく候御勉勵の結果二學期試験には好成績を得られ候由御油斷なく御勉強の程祈上候御兩親様をはじめ御一同様には只貴兄の御立身をのみ夢寐にも忘れたまふことなく神に佛に御祈りあらせらるゝこと故寸陰をも徒費せられず一層御奮勵一日も早く御卒業のほど念じ上候御丹精を凝らされし日光の寫生畫誠によく出來をり候太郎は大喜び致

## 病狀報知

し直に書齋に飾りつけ日々樂みをり申候先は右御返事まで早々

御心配相かけ候老母儀一時は頗る危篤に瀕し主治醫も手離しいたし候故縁者へは昨夕夫々打電いたし一同愁傷罷在候處午後八時頃より脈搏だんぐ平常に復し體溫も増し顔の血色も宜しく相成閉ぢづめの眼を開き傍なるもの顔をうち守り自分の用をいひつけ申すほどに相成一同愁の眉を開き申候次第に御座候間御通知申上候併し何分老體のことに候へば何時いかなる

變狀を呈せんも計りがたく候その節は又々御知らせ可申上候勿々

### 右返事

御老母御危篤に被爲在候趣承り只今より御伺ひ申さんと思ひをり候折柄御書面に接し驚きながら披見仕候處だん／＼御快くならせられ候由夢の心地仕候一同胸撫下し候併し御油断は必ず／＼御無用に御座候愚妻さしつかはし候間相當の御用被仰付度候先は右御返事まで早々

行年や母健かに我れ病めり

(五規)

### 商況をしらす

貴店益御繁榮奉賀候扱御照會に相成候當市商況別段先月と異なりし様子無之候へども御承知の通り株式界不振のため其の影響一般の商店に及ぼし一向不景氣に御座候歳末に迫りをるもその一因たるべきかとも想はれ候贅澤物の如きは存外に景氣良く呉服類の如きも上等品は賣足早くその他一般に上等のものは好景氣に御座候これ全く二三年引つゞきし不景氣のため可成節約的主義をとり中流以下は専ら節約を守りをれど上流社會は更にそれ等

のことに頓着せぬ故かと存候かれこれ愚考仕候に今後御製造にかゝる分は努めて上流向きのみとし價格の高さを意とせて品質佳良製造入念のものが勝利を得んことと存候先は御知らせまで早々

いざや寝ん元日は又あすのこと

(續付)

### 右返事

御紙面拜見仕候貴地商況委細御報導下され難有存候不景氣の風は山間僻地まで響きわたり候こととて何れの商店も歎聲を漏らしをり候しかしこれは

御手紙の如く中流以下のこととて當地などにも上等に位するもの等は人目を驚かささんばかりに派手をつくし贅澤を極めをり候こと故今後の製品はすべて上流向きとして輸送可仕候へば何分よろしく御捌き下されたく定價の儀は追つて改正いたし御覽に供すべく候先は御答まで略筆

流水不腐、戸樞不蠹

〔招待門〕

### 花見の宴に招待す



快晴打續きて御同慶に御座候扱吉野櫻満開と相成候明日にも雨に成り候は  
 惜しく候へば今夕入魂の人のみ御招き申し花見の小宴相催度候間御差支  
 無之候はゞ夕六時に御來車の程希望仕候山本田中川上の諸兄にも申上置候  
 間多分御出で下さること、存候御馳走は木芽田樂のみに御座候不一

神武天皇祭後一日

花野芳太郎

川野清雄君

玉案下

露も笠着て出でよ花の雪

(芭蕉)

### 右返事

玉章拜見仕候今夕花見の御宴御開きの由にて態々御招き下され嬉しく存候  
 ちらく〜と散る花片を杯にうけつゝ篝火の下に心あふ友どちと酌みかはし  
 候はゞいかばかりたのしからんと日のくるしも待遠しく覺えられ候幸ひ伊  
 丹の知己より送り越し候一樽有之候間乍失禮御便に托し候今夕の御宴に御  
 用ゐ下さらば幸榮に御座候謹言

山里の春の夕暮来てみれば

(鹿田 詩郎)

いりあひの鐘に花ぞ散りける

櫻ちる木の下風は寒からて

(紀元之)

空にしられぬ雪ぞ降りける

花咲かば告げんといひし山里の

(讀入しらす)

使はきたり馬に鞍おけ

### 病氣全快祝ひに招く

春和之砌益々御清康に被爲入候段奉大賀候小生入院中は度々御見舞下され  
かつ留守宅の事につきいろ／＼御心添へ下され御厚誼深く奉謝候退院後は  
日に増し快く相成候故聊か祝意を表せんため今晚七時より芝、竹風軒にお

いて小宴相開きたく候間御多忙中反つて御氣の毒ながら御來車被下たく來  
賓は別段氣づしなき御方としては參らずみな心あきなき人のみに候へば御遠  
慮なく御出て下さるべく右御招きまで早々

### 右返事

拜復御退院後は日増に御快方に向はせられ候由大慶この事に存候御入院中  
は頓と御見舞も不致たゞ御留守宅に參り折々御容體拜承仕り候のみにて申  
譯もなき失禮なるにも關らず御全快祝に御招待の榮を辱うし汗顔の至りに

御座候御辭退申さんかとも考へ候へどもそは反つて失禮と存候間仰せの時  
刻に竹風軒に参り末席を汚すべく不取敢御返事まで寸楮を呈し候敬具

### 婚禮の宴に招く

拜啓仕候春色駘蕩之候と相成候處御闔家益々御清康奉恭賀候扱長男芳郎儀  
今般三井物産會社理事高山昇氏長女とし子と婚約相纏り神武天皇祭の吉日  
を卜し日本橋區濱町三丁目一番地岡田亭において結婚式舉行致したく候間  
御多忙中乍恐同日午後五時までに令夫人御同道にて御列席被成下たく此段

御招待申上候謹言

### 右返事

朶雲拜誦仕候如仰春暖之候と相成候處益々御安適に被爲在大慶に奉存候さ  
て御長男様には高山様御令嬢と御婚約調はせられ神武天皇祭の吉日を卜せ  
られ御結婚の御式岡田亭において御舉行遊ばされ候由特に御招き被下難有  
奉謝候當日は時刻よりも少々早く伺候可仕相當の御用有之候はゞ被仰付た  
く候先は貴酬まで如此に御座候頓首

## 卒業せし祝宴に招く

謹啓春暖の時に相成候處愈御清榮之段奉大賀候儲次男謹次儀今般漸く東京帝國大學醫科大學卒業いたし郷里において開業仕ることに決定仕候就いては聊か卒業の祝意を表せんため明日午後三時より日昇亭において小宴相開きたく候間御出席被成下度尤も當日は心安き人のみに候へば少しも御遠慮は入り不申此儀一寸申添へおき候

なほ小供衆の御慰みとして手品、太神樂などの餘興も有之候間御愛見様

御召連れ下されたく候不宣

ナレズカレ  
ナレズ  
スナ  
恭則遠於患敬則人愛之

(見)

## 右返事

玉章謹讀仕候貴命の如く春暖之時と相成候處御一同様御揃ひ被遊御機嫌克く御慕しの由大慶奉存候扱御令息謹次様には永年御修業被遊候効果空しからて此度醫科大學御卒業被成候由兼て新聞にても敬承いたし御祝ひに參らんとおもひをりながら多忙に追はれ失禮いたしをり候處御祝宴に御招き下